

CODE 海外災害援助市民センター
2009 年度事業報告
2009. 4. 1～2010. 3. 31

CODE 海外災害援助市民センター
2010. 6. 19 総会資料

◆事業報告一覧

事業	事業名	実施日時	実施場所	受益対象者の範囲及び予定人数	支出額 (千円)
海外災害地への救援活動事業	救援プロジェクト	随 時	アフガニスタン	対象地域住民	1,196
		随 時	アルジェリア	対象地域児童	0
		随 時	イラン・バム	対象地域住民	25
		随 時	バングラディシュ	対象地域住民	1,214
		随 時	インドネシア・ジャワ	対象地域住民	21
		随 時	ミャンマー	対象地域住民	1,385
		随 時	中国・四川	対象地域住民	4,360
		随 時	イタリア	対象地域住民	397
		随 時	サモア・西スマトラ	対象地域住民	246
		随 時	ハイチ	対象地域住民	2,082
随 時	チリ	対象地域住民	78		
人材育成事業	NGO ことはじめ	実施せず	———	———	0
	HAT 国際機関訪問	実施せず	———	———	0
	スキルアップ研修	随 時	全 国	スタッフ	0
	ボランティアの日	年 3 回	CODE 事務所	———	0
災害関連情報の収集及び発信事業	災害情報サイト(CODE World Voice)の運営	随 時	全 国	不特定多数 翻訳ボランティア 5 名	17
国内外のネットワーク構築事業	関係機関の開催するセミナー、シンポジウムへ出席	随 時	全 国	———	35
	神戸学院大学「防災・社会貢献ユニット」	2009 年 4 月～7 月	神戸学院大学ポートアイランドキャンパス	学生 30 人	0
	草の根協力事業(地域提案型)	2009 年 7 月	山梨県 兵庫県内	アフガニスタン 6 人 講師・スタッフ 約 10 人	3,715
	コープこうべハート基金運営委員会等で報告	2010 年 3 月	神戸市内	基金運営委員 20 名	0
「市民による災害救援」に関する調査・研究事業	CODE 寺子屋学習会	実施せず	———	———	0
	賛助会員数の増加	随 時	全 国	不特定多数	32

「市民による災害救援」に関する啓発及び広報活動事業	講師派遣と報告会	随 時	全 国	不特定多数	433
	機関誌とインターネット	機関誌は2回発行、 インターネット随時	CODE 事務所	機関紙 700 部	261
	冊子・グッズの発行・販	随 時	全 国	不特定多数	0
その他本会の目的達成の為に必要な事業	CODE エイド準備	実施せず	—	—	0
	スタッフ奨学金制度	随 時	全 国	スタッフ	0

【海外災害（地）への救援活動事業】

事業名（新規）	サモア・西スマトラ地震救援プロジェクト
実施日時	2009年10月2日から
実施場所	サモア諸島及びインドネシア・スマトラ島西部パダン県周辺
受益対象者の範囲及び予定人数	サモア地震発災直後の被災者は数万人 同西スマトラは数十万人
実施内容	<p>2009年9月29日サモア諸島で地震発生、その直後30日インドネシア西スマトラでも地震が発生したので標記のようにプロジェクト名は「サモア・西スマトラ地震救援プロジェクト」と両被災地併記としてきた。</p> <p><サモア></p> <p>サモアの事情をよく知っている者が事務局の身近にいなかったが、これまでのつながりからサモア事情に詳しい方が見付き、その方の知人が JICA 海外青年協力隊でサモアに赴任していたことが判り、被害状況の確認など情報収集をはじめ、救援活動の可能性を探ってきた。ただ、募金活動をしていた団体が口座を既に締め切っていたので、直接サモア政府の救援口座への送金を勧められた。民間への寄付の可能性を追求していくという判断から、次年度への継続プロジェクトとする。</p> <p><西スマトラ></p> <p>インドネシアは、インドネシア中部地震（2006）以来交流し続けているエコ・プロワットさん（ドクタ・ワナ・クリヤン大学）が中部ジャワ・ジョグジャカルタに住んでいることから、ただちに連絡をし、被災状況を収集しはじめた。エコさんの知人が被災地西スマトラパダンに住んでおり、またジョグ・ジャカルタに「パダン支援 NGO ネットワーク」ができたということもあって、若干あらたな情報も入取した。</p> <p>また、地震発生直後からいち早く CODE の藤野理事から「PHD 協会の元研修生が、モロに被災地に住んでおり、被害もあったようだ。従って PHD 協会は、必要であればその被災研修生を支援しなければならないだろう。」という連絡があった。やがてエコさんから、「中部ジャワ地震後のプロジェクトのように耐震構造による住宅建設を模索している」と連絡があり、知人を通して被災地でのその可能性を調査しているとのことだった。当会理事会で確認されたことは、理想的には両者に協議をして貰い、その元 PHD 研修生の住む村に、例えば多目的コミュニティホールのような建物を耐震構造で建てられないかということイメージしていることから、とにかく両者が一度会って頂いて意見交換をして貰うことが先決だということになった。やがて両者は直接連絡を取り合ったが、年度内に具体的な支援プロジェクトが決定できなかったので次年度への継続とする。</p>

事業名（新規）	ハイチ地震救援プロジェクト
実施日時	2010年1月13日から
実施場所	ハイチ共和国南西部レオガンを中心とした地域
受益対象者の範囲及び予定人数	Cardinal Leger 病院が位置する周辺 20 のコミュニティ、人口 7000 人 (レオガンの人口 134,000 人)

<p>実施内容</p>	<p>当会の海外研究員として、これまでも何度も協力して貰っているメキシコの NGO「メキシコ・トラテルロコ地区住民連絡会」のリーダーであるクワウテモックさんに連絡を取り、被災現地入り打診。彼は、ただちにスケジュールを調整し、1月25日から現地に入り活動を開始。首都ポルトー・ブランスから西に30kmほど離れたレオガンという街で拠点を確認し、周辺の被害状況を調査し、活動をはじめ。ちなみに、レオガンは JICA はじめ日本の緊急援助隊なども活動してきたところであり、またハイチ友の会（本部・山梨）のシスター須藤昭子さんが竹の苗を育成していたり、農業学校を建設しようとしているところでもある。</p> <p>地震発生直後から、日本の報道では救援物資の略奪、暴動などの情報が伝えられ、治安の悪化が強調された。しかし、そうした混乱は被災地のごく一部であると捉え、むしろ被災者はお互いが励ましあい、支えあい、この苦しい日々を耐えているという姿も確認できた。阪神・淡路大震災で私たちが経験した「自助」「共助」の姿が再現されているように思うほど、被災地は意外に落ち着いているというレポートも少なくない。</p> <p>そこでまず阪神・淡路大震災を経験した KOBE からハイチにできることは、励ましのメッセージによる“寄り添い”であるとし、自らも被災を受けたラジオ局として阪神・淡路大震災当時活躍した「ラジオ関西」との連携で、「ハイチへメッセージを送ろうキャンペーン」を展開した。集まったメッセージを関西在住のハイチ人 C さん夫妻に現地のクレオール語に翻訳して貰い、それを現地のクワウテモックに送信し、クワウテモックが現地のラジオ局を廻り、日本及び阪神・淡路大震災の被災地からの“寄り添いメッセージ”であることを伝えてくれた。クワウテモックはラジオ局に足繁く通い、被災地 KOBE をはじめ日本からのメッセージを積極的に流してくれるようお願いして廻った。一日の大半は拠点にしている Cardinal Leger 病院（ここが後に、先述のシスター須藤さんの活動拠点だとわかった。）のサポーターとしてボランティア活動をしながら、同病院の周辺地域の被災実態の把握とプロジェクト案件の可能性を追求してきた。一方レオガンの2～3の教会における震災孤児保護の活動を調査しはじめた。クワウテモックは、どの教会も全壊で再建のためのドナー探しをしていたので、例えばカナダ軍に相談したり、ドナーとなる NGO を探したり、サポートしながらそれらの孤児に対する寄り添い活動もはじめた。クワウテモックは同病院の診療再会を機に、拠点を近くの T シャツ工場跡に移し、テント生活をしながら現地のドクターやドイツの医療支援 NGO、アメリカを本部に置くシェルター建設を主な活動としている NGO メンバーと“NGO 村”を立ち上げ、みなさんの信頼を得、CODE のクワウテモックとして活躍している。</p> <p>ハイチ地震支援ニュースは3月末で39号まで発行。</p> <ul style="list-style-type: none"> * 世界語り継ぎネットワークで、ハイチ地震について緊急報告 (3/20～23) * ハイチ支援の寄付は、6,050,736円 (3月31日付け) * クワウテモックは、第一次派遣 (1月25日～3月10日)、第二次派遣 (3月30日～5月15日) の予定。 <p>なお、いつものように当会の平時の通年事業でもある「CODE ワールドボイス」の翻訳ボランティアも協力して下さり、UNOCHA リリーフ WEB の情報からハイチ地震災害後の暮らしに密着した情報を選択した上で翻訳し、当会ホームページを通して発信してきた。</p>
-------------	---

<p>事業名 (新規)</p>	<p>チリ地震救援プロジェクト</p>
<p>実施日時 実施場所</p>	<p>2009年2月27日 チリ国コンセプション</p>
<p>受益対象者の範囲及び予定人数</p>	

<p>実施内容</p>	<p>災害史上最大規模になるのではと言われた程の大規模被害となったハイチ地震のすぐ後であったこととチリには直接の人脈がないこともあって、充分対応できなかったのが現実。やがて CODE の正会員である鶴飼医師が理事長を務める「HuMA」(人道医療支援会)が、現地での医療支援を表明されたので、同 NGO からの情報提供を待つ。一方 JICA 兵庫の 2009 年度の研修で事務局長の村井が出会ったチリの研修生に、神戸大学都市安全センター連携融合事業担当者から連絡を取って貰いつつ、同研修員を HuMA から現地派遣された T 医師につないだ。その結果、T 医師の現地での活動がスムーズに運び、大変喜ばれた。神戸大学都市安全研究センターは、サンチャゴにある首都圏地域保健事務局に勤める 2 人の職員にメールを打ち、調整を図って頂いた。このお二人が 2007 年度、2008 年度の研修生であった。今回の地震津波は、M8.8 という大きな地震であったが、過去の教訓を踏まえた事前の備えが功を奏したこと、建物の耐震基準・耐震施行もしっかりしていたことから、チリ政府も被害を下方修正した。ちなみに、日本の緊急援助隊は迅速な判断で、すぐ日本を出発したものの、途中でチリ政府から「お断り」の通達がでたために、「調査」に切り替え、被災地を訪問することにされた。また JICA の専門員としていち早く現地入りした I さんからも現地レポートが届き、HuMA から現地入りされた医師のレポートとあわせて、CODE のチリ地震支援ニュースにも転送させて頂き、CODE の関係者には被災地の状況を、ほぼリアルタイムでレポートすることができた。今後については、JICA 兵庫で 4 月 9 日に予定されているチリ地震報告会での関係者の報告を聞いて検討することになった。従って本プロジェクトは新年度への継続となる。</p> <ul style="list-style-type: none"> * チリ地震支援ニュースは 12 号発行 (3 月 31 日現在) * 世界語り継ぎネットワークのシンポジウムでチリ地震について緊急報告 (3/20~23) <p>* 3 月 31 日現在での寄付は、516,000 円</p>
-------------	--

<p>事業名 (新規)</p>	<p>イタリア地震救援プロジェクト</p>
<p>実施日時</p>	<p>2009 年 4 月 7 日から</p>
<p>実施場所</p>	<p>イタリア・首都ローマから約 100 km 離れた震源地ラクイラ周辺</p>
<p>受益対象者の範囲及び予定人数</p>	<p>ラクイラ約 6 万人 (人口 7 万人)</p>
<p>実施内容</p>	<p>2009 年 4 月 6 日に発生した地震に対し、JAL の協力によってスタッフ尾澤良平を被災地に派遣 (4 月 23 日~4 月 30 日)。帰国後現地報告会を開催し、さらなる支援を呼びかけた。このよびかけに応じて関西在住のイタリアバロック音楽を演奏しておられる音楽家達が、イタリア地震支援のための「チャリティコンサート」を開催してくれた。また、「チャリティアート展」(喫茶含む)も CODE 会議室で開催され、そこでの収益金はイタリア支援として寄付された。</p> <p>一方尾澤は地震後被災者に対する心のケアの一つとして、日本ですでに定着しつつある「ドクター・クラウン」について学び、もう一度現地に行ってそれを生かせないかと、ドクタークラウンボランティアコースを学びはじめた。現地との情報交換がスムーズに行かないこともあり、次なる具体的な支援がつかないまま 2009 年度が終わった。ちなみに、チャリティコンサートで支援してくれた音楽家達とはイタリア地震を通して出会い、支援の大きなきっかけとなったイタリア版「道化師治療」を学ぶために、</p>

	<p>まず日本での類似の研修を受け、若者の気づきに生かすことを多いに賛同してくれた。継続。</p> <ul style="list-style-type: none"> * 尾澤良平の派遣 4月22日～31日 * 5月6日 イタリア地震支援報告会 (CODE 会議室、尾澤良平) * 6月12日 イタリア支援チャリティコンサート (西宮甲東ホール) * 6月21日～28日 チャリティアート展 (CODE 会議室)
--	---

事業名 (継続)	アフガニスタン支援プロジェクト ～ぶどう畑再生支援事業～
実施日時 実施場所	2003年から開始。 アフガニスタン・カブール州ミール・バチャコット地域の4村など
受益対象者の範囲及び予定人数	ミール・バチャコット地域の人口は約15,000人。本事業に直接裨益する農業従事者は、446世帯。
実施内容	<p>治安の悪化から、直接アフガニスタン現地に行って支援活動を行うことは困難になっていることから、アフガニスタン現地に入って支援活動をしている NGO には、外務省は「遠隔操作」での支援に切り替えるよう呼びかけてきた。当会は、早くにそのような事態を予測したために、アフガニスタンからぶどう農家を招いて、日本で農業や防災について学べないかと考え、兵庫県佐用町を提案自治体として JICA の草の根地域提案型に案件申請をしていた。従って、2007年に同案件が採択されてからは、3年間の事業として同事業を実施し2009年度で最終年次を終えた。詳細は、後述の JICA 草の根地域提案型事業報告を参照。ちなみに、日本政府のアフガニスタン支援内容が文民支援となったことから、JICA 本部から JICA 兵庫経由で CODE のぶどう畑再建支援プロジェクトに対するヒアリングがあった。</p> <ul style="list-style-type: none"> * 9月25日 講演「アフガニスタンの問題を考える」(憲法を生かす会・垂水、村井理事) * ぶどう基金は3月31日で、延べ2,103件15,491,218円

事業名 (継続)	「ジャワ島中部地震救援ウォータープロジェクト」 (通称：“呼び水プロジェクト”)
実施日時	随時 (2006年5月27日から) 同プロジェクトは2008年4月1日から継続)
実施場所	インドネシア・中部ジャワ Yogyakarta 省 Gunung Kidul 地区 Giri Sakar 村 (Giri Sakar 村の住宅被害は全半壊6軒)
受益対象者の範囲及び予定人数	Giri Sakar 村住民30世帯132名およびその周辺の RT

<p>実施内容</p>	<p>2006年のジャワ地震後に当会の支援プロジェクトとして行ったゴトンロヨンによる住宅再建は同年10月に終了し、その後この住宅再建のパートナーとして現地ドゥタ・ワカナ・キリスト大学エコ・プラワット教授の仲介により、同じジャワ地震被災地のグヌンキドゥル地区ギリサカール村の水問題に関する支援の提案があり（2007年）、2008年3月ウォータープロジェクトとして支援を決定、2008年11月度理事会において、“呼び水プロジェクト”と称して、持続可能な暮らしの確保の一步として、水プロジェクトを支援してきた。</p> <p>まず第一段階として本管から支管を敷設し、一度その水を貯水タンクに貯め、同村はじめ周辺の村に有料で給水活動を行ってきた。有料でもこれまでの水よりは安くなり、その差額をマイクロファイナンスとして貯蓄し、村の若者が主体的になって試みているアヒルの養殖業やトウガラシなどの野菜づくりに活用できるように小口融資活動も始めている。CODEとしては、この事業はアフガニスタン支援プロジェクトに続いて、被災者の復興支援から持続可能な暮らし支援プロジェクトへの移行プログラムとして位置づけてきた。</p> <p>一方これまでも乾季に水が枯渇していた現状を解消するために、雨期の雨水を貯蓄する雨水タンクを造り、通年としての水の確保に務めてきたが、乾季を通して賄えるだけの水が確保出来ないのが現状である。そのため永続的に水が確保できるように、天水の利用（ため池、貯水タンクなど）や井戸掘りなどを模索はして来たが、これとって“決定打”はないのが現状である。そこで日本にある技術を学び技術移転ができないかと模索してきた結果、JICAの地域提案事業（支援型）に応募できないかと考え、理事会に承認を得てJICAとの打合せを重ねてきた。すでに事業を実施するにあたっての「デザイン計画」を提出し、JICAとCODEとの第1回の意見交換が行われた。この意見交換で、事業をすすめるにあたっての準備段階での課題整理ができたので、当面これを解決するために、一度当会スタッフが現地に行き、被災者との協議を行い、それに基づいてドゥタ・ワカナ・キリスト大学およびエコ・プラワット教授との協議をし、全体のイメージの共有が必要となった。2010年2月段階ではこの事業をすすめるにあたっての基礎的な「生活実態調査」が不可欠であり、エコ・プラワットさんにそのためのアンケート調査を依頼し、一回目の回答は受け取った。</p> <p>なお“呼び水プロジェクト”についてのその後については、2009年10月にエコ・プロワットさんが新潟にこられたときに、ディスカッションをしている。</p> <p>また、2008年9月、CODEとの協働事業としても位置づけられている神戸学院大学「防災・社会貢献ユニット」の浅野壽夫教授のゼミが、同村をフィールド学習の対象地に選び、学生十数人と共に同被災地を訪れ、報告書もつくられたが、2009年度はインフルエンザ発生のため海外研修が中止のため行けなかった。（同教授は2010年度も学生を連れて訪問する予定。）</p> <p>*2010/2/3 神戸大学都市安全センター主催研究会「アジア農村の危機対応と住民戦略」（徳永・村井参加）</p>
-------------	--

<p>事業名（継続）</p>	<p>アルジェリア地震救援プロジェクト</p>
<p>実施日時</p>	<p>随時（2003年5月から継続事業）</p>
<p>実施場所</p>	<p>ブーメルデス県</p>
<p>受益対象者の範囲及び予定人数</p>	<p>被災人口約10万人</p>

実施内容	地震直後には、海外研究員であるメキシコのクワテモックさんを現地に派遣し、調査を行った。彼は、子どものサポートをしている NGO に出会い、活動内容を見せて貰ったが、その後同 NGO とは音信不通になった。従って、その後支援先および支援活動を定めるのに情報収集を重ねてきたが、適切どころが見つからず現在までになってしまった。2010年3月20日～22日まで神戸で開催された「世界語り継ぎネットワーク」のシンポジウムにアルジェリアからルジッラリ・ベヌアール（バブ・エズアール大学教授）さんという方がお見えになっていたのので、挨拶をして支援先紹介をお願いした。いま、返事待ちなので継続とする。
------	---

事業名（継続）	イラン南東部地震救援プロジェクト
実施日時	随時（2003年12月から継続事業）
実施場所	イラン ケルマン州バム
受益対象者の範囲及び予定人数	・対象地域に住んでいる約100人の子どもと同地域に住む女性など若干名
実施内容	CODE が支援のため建設したコミュニティーセンターは、現地の被災者主体の運営・管理に移行した。SNS（国際防災支援センター）などからの報告を参考にしながら現地の活動を見守ってきた。その後現地で活動する日本の NGO を通して、同センターが順調に機能しているという報告を受けており、同センターからの新たな事業提案もないが、もう少し見守ることになる。次年度に継続。

事業名（継続）	ミャンマー(ビルマ)・サイクロン「ナルギス」救援プロジェクト
実施日時	2008年5月7日から
実施場所	首都ヤンゴンから100km離れたエラワディー管区ラプタ県ピンサルー地区、ピャーポン地区
受益対象者の範囲及び予定人数	上記地域住民 約3500人
実施内容	HuMA（災害人道医療支援会）に託して支援していた「井戸掘り」プロジェクトが終了後、ミャンマーに詳しい CODE スタッフ T さんからの提案で、サイクロン発生後約1年が経過しているにもかかわらず、食糧不足で飢餓状態を招くという被災地域に対する緊急食料支援を呼びかけた（8月21日）。9月初めに現地カウンターパートの NGO メッタに送金し、9月10日メッタ・フィールドコーディネーターがピンサルー地区の3241人に20日分の米を配った。その後、余剰金で、2010年1月14日、ピャーポン地区の380人に24日分の米を配った。 これをもって、本プロジェクトは終了とする。

事業名（継続）	中国・四川大地震救援プロジェクト
実施日時	2008年5月13日から
実施場所	北川県香泉郷
受益対象者の範囲及び予定人数	(人口 7890 人)
実施内容	<p>2008年5月の地震発生以来、当会スタッフを現地に派遣し続けてきた。支援事業として、当初から寄り添い続けてきた北川県光明村を含む同県香泉郷に、同郷政府と合意し（4月）、設計図まで作成していた「総合活動センター」建設が、急遽中国共産党によって建設することになるという方針転換となった。CODEの息の長い寄り添い活動のおかげで、日常の医療をとおしていのちを守る業務を、党の責任で建設することになったのは喜ばしいことではあるが、当会としては本契約まで結び、設計図まで作成したあとなので、正直理解しがたい不透明感が残る。今後の支援内容を新たに探すにあたって、一つは香泉郷に建設される総合活動センターの機能を充実させるための中身の支援（医療機器、医薬品、放送設備など）を追求すること、また一つはこの総合建設センターの設計図はすでにあり、当然耐震については充分考慮したことから、香泉郷に一つを設置し、耐震モデルの建物として被災者にアピールできないかという案が持ち上がってきた。もし問題なく成立すれば、そのモデルハウスで高齢者のふれあいの場としての機能や、農家楽の可能性も追求することを検討。また一つは、場合によっては別の被災地での案件を模索しなければならなくなった。前者については、これまで吉椿雅道の努力によって築いてきた光明村住民との絆を維持するためにも有効なものになると思われる。今回の厳しい経験から、当会がNGOとして活動を続ける上での課題も見えてきたことから今後によい影響をもたらすことを願う。吉椿雅道が築いてきた絆は、国と国の関係が難しくても、人と人は国境を越えてつながることを証明してきたといえる。2010年1月からの第10次派遣は、次なる支援の可能性を探るためのものとなった。（継続）</p> <p><吉椿の派遣と理事の出張></p> <p>2009年2月21日～4月20日 第5次派遣 4月10日～14日 出張（芹田代表理事・黒田理事） 5月10日～6月17日 第6次派遣 7月6日～8月30日 第7次派遣 9月26日～10月30日 第8次派遣 11月6日～12月28日 第9次派遣 1月30日～2月17日 第10次派遣 2月28日～3月16日 第11次派遣</p> <p>* 四川に関連する報告会およびシンポジウム</p> <p>4/26 岸和田・小さな友の会で報告会（吉椿） 4/27 四川地震報告会 in 名古屋（吉椿） 4/29 「四川大地震から1年 今後の復興を考える」（UNCRD 兵庫事務所と共催で開催、芹田、村井、吉椿） 5/14 「阪神・淡路大震災の経験から四川大地震災害支援を考える」（日中友好の会・東京、村井） 9/17 四川報告会（金沢大学、吉椿） 11/2 四川大地震報告会（日本基督教団兵庫教区、吉椿） 12/5、6 被災地国際交流シンポジウム（金沢大学、吉椿） 2010/2/25 「震災復興とシビルソサエティの役割-日中台の経験から」（ひょうご震災記念21世紀研究機構、吉椿） 2010/3/20～22 世界語り継ぎネットで、四川省地震について報告（吉椿）</p>

事業名（新）	フィリピン台風ケッツアーナ水害支援
実施日時	2009年10月2日～11月20日
実施場所	首都マニラ周辺
受益対象者の範囲及び予定人数	
実施内容	いち早く HuMA（災害人道医療支援会）が現地に入り、被災の現状と活動レポートを送ってきた。一方 2009 年 8 月台風 9 号による豪雨水害で甚大な被害を受けた兵庫県佐用郡佐用町の被災者でもある「佐用町国際交流協会有志」が、フィリピンの水害を知って「人ごとではない！」と寄付を集められ、それを CODE に託された。しかし、残念ながら CODE はフィリピン水害支援を打ち出していなかったために、全額をいち早く現地で活動していた HuMA に寄付し、この活動を終えた。

【人材育成事業】

事業名	NGO ことはじめ
実施日時	
実施場所	当センター会議室
受益対象者の範囲及び予定人数	大学生など約 60 人（1 回 15 人程度）
実施内容	<p>今年度は、CODE の主たる事業である災害救援事業の報告会として下記のように開催した。</p> <ul style="list-style-type: none"> * イタリア報告会：5 月 6 日 尾澤良平 * イタリア支援のためのドクタークリニック勉強会：5 月 6 日 村上純子 * ミャンマーサイクロン「ナルギス」支援報告会：鶴飼卓先生（HuMA 理事長） * JICA 草の根地域提案型事業・アフガニスタン農業研修報告会：8 月 5 日 尾澤良平、小川奈菜

事業名	HAT 神戸内 国際機関訪問ツアー
実施日時	年間を通じて 1 回程度
実施場所	神戸市内
受益対象者の範囲及び予定人数	大学生など 10 人
実施内容	サモア・西スマトラ地震およびハイチ地震、チリ地震が発生し、人的余裕がなく、企画・実施ができなかった。

事業名	スタッフのスキルアップ研修（スタッフは専従・非専従を問わない）
実施日時	随時
実施場所	原則国内
受益対象者の範囲及び予定人数	若干名

実施内容	<ul style="list-style-type: none"> * 10月25日、新潟県長岡市を中心に開催された「中越・地震国際シンポジウム」にインドネシアからエコ・プロワットさんを招いたので、通訳とガイドを兼ねて非常勤スタッフ尾澤良平を派遣し、直接同氏とディスカッションすることでスキルアップを図った。後日、同氏からお礼のメールが入り、「尾澤は大変クレーパーな若者だ」と評価して頂いた。 * インドネシアの「呼び水プロジェクト」をJICAの地域提案支援型事業として提案するためのディスカッションに、まだCODE ボランティアスタッフの岡本千明も同席させ、JICA 事業についての基本の一部を学んで貰った。またこれまでに複数のNGO および日本大使館勤務などの経験豊富なキャリアを持っている非常勤スタッフ徳永加恵が、岡本千明及びCODE ワールドボイス担当ボランティアリーダーの澤桃子の両名にノウハウをアドバイスし、スキルアップを図った。
------	--

事業名	ボランティアの日
実施日時	隔月1回
実施場所	CODE 事務所
受益対象者の範囲及び予定人数	<p>今年度は、CODE レターの作成及び発送を担当していた非常勤スタッフ福田信介が急逝されたこともあって、しばらく同レターの発行が遅れていた。事務局としては、少なくとも彼の死後49日法要を執り行ってから、穴埋めと次なる作業を考えようということで敢えてニュース発行を急ぎはしなかった。そうした事情から、発送などにボランティアの手伝いを仰ぐまでもなかったが、丁度関西学院大学・関准教授のゼミ学生がボランティア研修プログラムにCODE レター発送も加え、手伝って貰った。</p>

【災害関連情報の収集及び発信事業】

事業名	災害情報サイト (CODE World Voice) の運営
実施日時	随時 (2002 年からの継続事業)
実施場所	SOHO 形式や当センターなど
受益対象者の範囲及び予定人数	不特定多数の災害情報を得ている人たちすべて。
実施内容	<p>中国四川省地震後には、SOHO で翻訳して下さっていたボランティア N さんが、相当量の中国語によるマスコミ情報などを日本語に翻訳して下さったものを、レポートで流し続けてきた。この CODE World Voice 始まって以来の大量の翻訳に、大変驚いていた読者も少なくなかった。</p> <p>また、ミャンマーサイクロンに関する被災地情報を翻訳 SOHO ボランティア K さんが翻訳し流し続けてきた。この時期、どうしても四川省地震情報が多すぎて、ミャンマーに関する情報が少なかったために、K さんはこの大切な隙間を埋め続けて下さっていた。その他不定期ではあるが、当会の事務所に来て翻訳ボランティアしている O さん (神戸大学) や N さん (大阪大学) が翻訳を手伝ってくれている。これまでは、こうした翻訳チェックを S さんが引き受けて下さっていたが、S さんが 2008 年 4 月から就職されたこともあって、一時チェックなしで流していた。この空白の約 1 年間の翻訳ボランティアは K さんと O さんが頑張ってくれていた。やがて元の S さんが 2009 年度に入って週一回のボランティアが可能なり、再び翻訳チェックが可能になったので、2010 年の 1 月からはようやくもとのような体勢になり、ハイチ地震対応では順調に翻訳を流せるようになってきた。以前から理想的には日本語だけではなく、少なくとも複数の言語に翻訳して流せればと目標を掲げているのだが、なかなか担い手がないのが現状。</p> <p>なお、2009 年度は、例年行っていた年 1 回の松蔭女子高校生による翻訳ボランティア実習はなくなった。また余談だが、2009 年 10 月にエルサルバドルで発生した水害情報については、2009 年 4 月から JICA の海外青年協力隊でエルサルバドルに赴任していた CODE ボランティア OB の「岸本くるみ」さんが、スペイン語の新聞記事を訳して送ってくれたことを付記しておきたい。</p>

【ネットワーク構築事業】

事業名（継続）	（関係機関からの受託事業）神戸学院大学「防災・社会貢献ユニット：社会貢献論Ⅰ」の前期授業企画（14回）および講師派遣
実施日時	4月14日から7月21日まで、毎週火曜日第4限目。（5月5日は休講）
実施場所	神戸学院大学ポートアイランドキャンパス
受益対象者の範囲及び予定人数	約30人
実施内容	<p>（同学院大学学生のシラバスに紹介されている文章）</p> <p>一阪神・淡路大震災から15年を迎え、災害経験の風化が叫ばれつつある。しかしながら、その経験を風化させないことは、今後起こりうる災害に対して、我々がどのようにそれに立ち向かい、被害をより少なくするかの大きな知恵を与えてくれるものである。阪神淡路大震災では、公的機関の支援はもとより、被災地域の人たちや民間のボランティアの人々が新しい社会を築く力であることを知った。この授業は、阪神淡路大震災を契機に神戸の市民を中心に設立した「CODE 海外災害援助市民センター」との提携により実施するものであり、わが国の災害救援ボランティアを中心とした民間レベルでの活動について学ぶことを目的とする。したがって、その内容は、CODE 及び海外で活躍しているNGOの活動について実際に活動している方々を招いて、現場の声を聞き、そのコンセプトと活動内容、課題について考察していく。</p> <p>このように CODE とのコラボレーション事業という位置づけで始まった神戸学院大学社会貢献ユニットへの講師派遣は、2009年度も下記のようなスケジュールと講師陣および内容で実施した。</p> <p><内容></p> <p>第1回（4/14） ガイダンス：約30名出席（浅野、村井）</p> <p>第2回（4/21） CODE海外災害援助市民センターが担う社会貢献について（村井）</p> <p>第3回（4/28） 阪神・淡路大震災から15年目の「いま」、被災者は？（牧秀一）</p> <p>第4回（5/12） 地域学～明石の町おこし、地域おこしから学ぶ（松本誠）</p> <p>第5回（5/19） 減災サイクルともう一つの社会（村井）</p> <p>第6回（5/26） 農業と持続可能な社会（本野一郎）</p> <p>第7回（6/2） 災害時における地域力（織田峰彦）</p> <p>第8回（6/9） 前期の振り返り（村井、浅野）</p> <p>第9回（6/16） ジェンダーと災害（齊藤容子）</p> <p>第10回（6/23） 四川大地震から学ぶ（村井、吉椿）</p> <p>第11回（6/30） 能登半島地震から学ぶ（村井）</p> <p>第12回（7/7） インドネシア・ジャワから学ぶ“地域自立の経済”（浅野）</p> <p>第13回（7/14） 同上の支援事例研究発表より学ぶ（村井、浅野）</p> <p>第14回（7/21） まとめ（浅野、村井）</p> <p>* 6/18 「2009地域コミュニティ入門－災害と地域－をテーマに講演（村井、主催：ポアアイ4大学連係推進センター）</p> <p>* 後援あるいは協カイベント</p> <p>1/24 シンポジウム「阪神・淡路大震災と四川大地震からの教訓」</p> <p>3/22 第一回防災・社会貢献ディベート大会</p> <p>* その他、随時同ユニット主催で毎月第3火曜日夜、同大学チャレンジショップで開催され全・安心社会システム研究会に参加する。</p>

事業名（継続・終了）	（関係機関からの受託事業）「アフガニスタン・カブール州シャモリ平原における農業開発と地域防災の相互補完促進事業」（JICA 草の根技術協力事業（地域提案型）三年次）
実施日時	7月1日から～11日まで
実施場所	主に兵庫県佐用町、補助で山梨県牧丘町倉科
受益対象者の範囲及び予定人数	アフガニスタンからの研修生7人と研修生の出身地であるアフガニスタン・カブール州ミールバチャコットの約15000人
実施内容	<p>JICAの平成20年度草の根技術協力事業（地域提案型）として実施。今年度は3年目で最終年次。昨年同様、当初はアフガニスタンから7名の研修生を招く予定だったが、アフガニスタンにおける大統領選挙の関係で直前になって一人減り、6名となった。内1名は地域の評議会議長、もう1名は県の協同組合課長、また2人の農業従事者は本研修を3年続けて受けてきたメンバーという構成で最終年次の研修が始まった。本研修が終わっても、研修成果が彼等の村に、またアフガニスタン全土に広がっていくことを強く願いながらの研修だった。研修先については、前年度と同じだが、今年度は全日程を通して、ダリ語（アフガニスタンの現地語の一つ）－日本語の通訳を確保したので充実した研修となった。</p> <p>また、最終年次でもあったため、確実に研修成果が現地で生かされるようにJICAとの本事業の契約を長くしたことにより、遠隔操作とはいえ、現地で確実に研修成果が生かされているかのモニター期間が取れたことが有意義であった。ますます今後の現地における普及が期待できる。研修内容において特筆すべき内容は、最終日にこれまで3年間の振り返りをしつつ、今後のための「10年計画」を作成するというややハードルの高い目標設定したワークショップを行ったが、見事に研修生は10年を具体的に、身近に、手応えのあるものとして捉え、何よりも10年後に学んだ成果が実を結ぶためには、3年目、6年目と段階を追って短期、中期と目標設定をし、10年目の計画が描けるためには大前提として「争いのない平和なアフガニスタン」でなくてはならないと決意されたことが大成果であると言える。</p> <p>また、研修途中で副産物的に発見したこととして、佐用町で学んだ大豆づくりについては、アフガニスタンの大きな課題でもあるケシ栽培の代替としての可能性があり、豆腐づくりの実習や大豆加工品の試食などに高い関心を示していた。是非、ケシ栽培の代替として大豆栽培と加工に取り組んでくれれば、道筋は開かれると信じたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> * JICA 草の根地域提案型事業について説明会（佐用町にて） * 8/5 アフガニスタン農業研修会報告会 当会会議室（再掲） <p><第3年次研修日程></p> <ul style="list-style-type: none"> 7月1日 成田着、JICA 東京に宿泊 7月2日 山梨県に移動 7月3～6日 澤登農園等にてぶどう有機栽培の実習と講義 7月7日 兵庫県佐用町へ移動 7月8～9日 佐用町農業関連施設見学と交流学习、現地への普及計画 7月10日 3年次の振り返り 7月11日 関空発 <ul style="list-style-type: none"> * 詳細はぶどう新聞13号を参照。 * JICA 広報でも紹介される。

事業名	関係団体への正会員加盟やシンポジウムなどの実行委員会あるいは運営委員会への参加
実施日時	随時
実施場所	
受益対象者の範囲及び予定人数	
実施内容	<p>4/18 紙芝居シアター「わたしたちの生きる星—語り継ぐ「いのち」と「安全」—」（協力団体として参画）</p> <p>5/23 関西 NGO 協議会総会に出席（村井理事）</p> <p>5/21 ぼたんの会・夜会に参画</p> <p>6/2～7 ネパールで開催された UNCRD 兵庫事務所主催のワークショップに講師として招かれる。（村井理事）</p> <p>6/10 第3回大震災教訓発信シリーズ「阪神・淡路大震災の教訓と復興過程における災害弱者問題」に参加（村井理事）</p> <p>6/15 JICA 集団研修「都市地震災害軽減のための総合戦略」 村井</p> <p>6/25 関西 NGO 協議会理事会（村井理事）</p> <p>9/3 関西 NGO 協議会理事会（村井理事）</p> <p>10/17、18 中越地震 5 年フォーラムで四川、アフガニスタン報告（吉椿雅道、尾澤良平）</p> <p>11/27 UNCRD 兵庫事務所 10 周年記念シンポジウムでアフガニスタンぶどうプロジェクトについてスピーチ（村井理事）</p> <p>11/28 関西 NGO 協議会理事会（村井理事）</p> <p>2010/1/14 国際防災・人道支援フォーラム 2010「都市の減災に向けて」に参加。</p> <p>1/15 JICA 平成 21 年度「海外メディア本邦招聘プログラム」で講義（村井理事）</p> <p>1/16 神戸新聞社主催「つながる思い、世界のために」、芹田代表理事と元 CODE スタッフ齊藤容子がパネラーとして登壇</p> <p>1/17 ぼたんの会「竹下景子“詩の朗読と音楽のタベ”」に参画</p> <p>1/18 国際防災シンポジウム 2010/APEC 防災 COE フォーラム「都市の安全と気候リスク」に参加</p> <p>1/25 関西 NGO 協議会理事会（村井理事）</p> <p>2/14 関西 NGO 協議会主催のフリーマーケットに出店（細川、ボランティアスタッフ）</p> <p>2/17 しみん基金ファンドレイジングパーティに参画</p> <p>2/25 シンポジウム「震災復興とシビルソサエティの役割—日中台の経験から」で報告（吉椿雅道）</p> <p>2/25 JICA 兵庫で開催された「ハイチ派遣団員帰国報告会」に参加（村井理事）</p> <p>2/26 21 世紀文明シンポジウム「災害をめぐる国際協力の仕組みづくり」で村井理事がパネラーとして登壇</p> <p>3/24 関西 NGO 協議会理事会（村井理事）</p> <p>3/20～22 世界災害語り継ぎフォーラムに参画</p>

事業名	(関係団体の主催する事業との連携) コープこうべ自然災害救援基金での報告会にスタッフ派遣。
実施日時	最低年1回
実施場所	コープこうべ生活文化部
受益対象者の範囲及び予定人数	会員はじめ不特定多数。
実施内容	今年度、報告会は一度だけ開催される。 * コープボランティアサークル「ひまわり」で、四川省での活動を報告(吉椿)

事業名	(関係団体の主催する事業との連携) ゆとり生活館 AMIS(1F)のNPO/NGO 交流コーナーに参加
実施日時	年数回開催
実施場所	同会館1階
受益対象者の範囲及び予定人数	同会館利用者
実施内容	3月7日に開催されたコープファミリーフェスタに同コーナー(ユニセフ、PHD協会、CODE)も参加し、CODEからは細川が出席。ハイチの被災写真を展示し、ハイチ地震支援もアピールした。

事業名	「ほっとけない世界のまずしさ」キャンペーンへの参加
実施日時	随時(2005年9月から継続事業)
実施場所	全国各地
受益対象者の範囲及び人数	
実施内容	キャンペーン自体は終了しているので、在庫をさばく。 販売数 0本 * ホワイトバンド在庫147本は、CODE販売物として計上し、本キャンペーンは終了する。

【「市民による災害救援」に関する調査・研究事業】

事業名（新）	CODE 寺子屋学習会
実施日時	随時
実施場所	CODE 事務所
受益対象者の範囲及び予定人数	役員、事務局員、CODE 会員、関係者、一般。
実施内容	当会の主たる事業である災害救援の具体的な報告会としては開催してきたが、それ以外に学習会レベルでの寺子屋は開催してこなかった。

【「市民による災害救援」に関する啓発及び広報事業】

事業名	賛助会員の拡大
実施日時	随時
実施場所	全国各地
受益対象者の範囲及び予定人数	不特定多数
実施内容	拡大目標として、賛助会員の 20 名増員を目指してきた。以前から監事から指摘されていた「新たな賛助会員獲得」方法として、当会発足以来保管している災害救援の寄付者名簿から、一般からの寄付者だけを名寄せし、ニュースレターの行っていない先に賛助会員加盟の呼びかけをした（9 月中旬）。対象約 700 名に封書でお願いしたところ、10 名の方が新たに賛助会員になって下さった。

事業名	救援プロジェクト報告会及び講師派遣
実施日時	随時
実施場所	全国各地
受益対象者の範囲及び予定人数	不特定多数

<p>実施内容</p>	<p>当会の主たる事業である救援プロジェクトについての報告会を必要に応じて開催してきた。</p> <p><中国四川大地震関連></p> <ul style="list-style-type: none"> * 4月26日 岸和田土生神社にて中国四川大地震報告会（再掲） * 4月29日 UNCRD・CODEの共同による中国四川大地震合同報告会（再掲） * 5月14日 日中友好協会からの招待で、中国四川大地震報告会（再掲） * 11月2日 日本基督教団兵庫教区で四川大地震報告会（再掲） * 11月10日 四川省派遣被災地幹部訪日研修団への講義（村井理事） <p><イタリア地震関連></p> <ul style="list-style-type: none"> * 5月6日 イタリア地震支援報告会開催 CODE 寺子屋にて（再掲） <p>なお、2010年2月27日関西学院大学復興制度研究所主催で開催される「ハイチ地震報告会」には、当会から報告者として登壇しないが、大阪在住のハイチ人を紹介した経緯もあるので、当会事務局スタッフが参加。</p> <p>また、2010年3月20日から22日に開催された「世界語り継ぎネットワーク」で、急遽ハイチ及びチリ地震報告をすることになった。</p>
-------------	---

<p>事業名</p>	<p>（関係機関からの受託事業）龍谷大学、関西学院大学等への講師派遣委託</p>
<p>実施場所</p>	<p>下記の通り</p>
<p>受益対象者の範囲及び予定人数</p>	<p>講義の受講生</p>
<p>実施内容</p>	<p><日本防災士機構への講師派遣></p> <ul style="list-style-type: none"> * 6月14日 奈良会場 * 6月21日 石川県・能登空港会場 <p><県立舞子高等学校></p> <p>10月13日 村井</p> <p><神戸大学都市安全研究センター></p> <p>11月3日「震災復興におけるNGOの役割とコミュニティ防災」村井</p> <p><ひょうご防災リーダー養成講座></p> <p>11月7日 村井</p> <p><龍谷大学 国際NGO論></p> <p>11月18日 村井</p> <p><関西学院大学 キリスト教と社会B></p> <p>12月4日 村井</p> <p><神戸市立楠高等学校></p> <p>2010年1月22日1限</p> <p>2010年1月28日2限 村井</p>

事業名	機関誌及びインターネットによる情報発信
実施日時	機関誌は年々発行 インターネットは随時
実施場所	CODE 事務所
受益対象者の範囲及び予定人数	機関誌は全国各地 700 人/団体 インターネットは不特定多数
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> * CODE レターを、7 月、12 月と 2 回発行した。(1 回に 700 部発行) * 2010 年 1 月 17 日 NHK・BS 放送で吉椿雅道取材した四川地震プロジェクトが放映される。 * 2010 年 1 月 16 日 NHK クローズアップ現代で四川地震はじめ当会の活動が取り上げられる。 * 自治体国際交流の雑誌に芹田代表が投稿 (2007 年 7 号) * ホームページやメーリングリストを利用したインターネットによる情報発信も行ってきた。CODE のメーリングリストは多くの方に見て頂いていることもあって、今年度もメーリングリストに必要な情報を流すことに努力してきた。 * 例年同様、新聞、テレビ、雑誌、ラジオなどのメディアに対して積極的に広報を行ってきた。今年は阪神・淡路大震災の 15 年という節目でもあったからか、四川での活動には反応が多く、寄付の申し出が多かった。またハイチレポートに関しては、いち早く大阪在住のハイチ人のメッセージを掲載した関係か、他の災害に比べて注目度が高かった。特に、読売テレビや中日新聞がハイチ地震 1 ヶ月目 (2 月 11 日) に取材申込があり、阪神・淡路大震災がきっかけに発足した当会がハイチ支援にいち早く動いたことが評価されたようでアピール効果が倍増した。 * 昨年度も紹介したが、非常勤スタッフである徳永加恵さんの能力に頼るところが大であるが、日に日に HP が充実し、問い合わせも増えてきた。

事業名	冊子及び書籍等の発行及び支援グッズの販売
実施日時	随時
実施場所	CODE 事務所
受益対象者の範囲及び予定人数	不特定多数
実施内容	<p>ここ数年手つかずであった下記の 2 点について、当初は当会のブックレットとしての発行を考えていたが、2010 年と時間が経過しすぎた感が否めないが、内容は災害救援および国際協力を学ぶ上での原点的教材でもあるので、とりあえず各理事および事務局メンバーの数だけ印刷製本しデータとして保存することにした。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「国際的な人道活動と CODE」 CODE 設立 2 周年記念での芹田代表理事による講演録 ・ 「予防防災」 2005 年度寺子屋防災での室崎副代表理事における講演録 <p>書籍や支援グッズの販売実績</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ CODE T シャツ 0 枚 ・ 「災害救援」 27 冊

【その他本会の目的達成の為に必要な事業】

事業名	CODE エイド設立のための情報収集および研究
実施日時	随時
実施場所	CODE 事務所
受益対象者の範囲及び予定人数	約5人
実施内容	<p>本プロジェクトは、発足当初以来検討されているが、正直当会を財政的に支えるファンドづくりは難しい。しかしながら阪神・淡路大震災をきっかけに生まれた災害救援NGOとして、期待されているところは大きい。年々寄付額が減少傾向にあることも事実である。最近「ツイッター」というツールが注目されてきたので、電子募金として「ツイッター募金」を採用するところが急増したので、ハイチ地震の募金活動の機会としてこの手法を使えないかと探してみたが、すでにヤフー、グーグルが扱うツイッター募金に相当数登録しており群雄割拠の呈をなしている。ちなみにあいかわらず日本赤十字への寄付が圧倒的である。そんな中で、ハイチ地震のあと「ソーシャルコンシェルジュ」というところが、寄付先としてYahoo!ボランティア 公式ブログの“社会貢献的ショッピングのすすめ”で当会を紹介してくれている(http://blogs.yahoo.co.jp/yj_volunteer/)。</p> <p>なおパブリックリソースセンターからの「Give One」という電子募金からは今年度も寄付を受けた。</p> <p>* 合計 4件、7800円(手数料差し引き後)</p>

事業名	CODE スタッフへの奨学金制度の継続について
実施日時	随時
実施場所	
受益対象者の範囲及び予定人数	直接裨益するものは若干名
実施内容	<p>本奨学金制度は、5目に入る。1年目の該当者は齊藤容子であるが、当人が留学する直前に開いた歓送会終了後、その時集まった資金53万円を全額本人に奨学金として手渡す。以後該当者の提案がなかったため実施して来なかった。</p> <p>なお初年度の齊藤容子が随時返済しており、そのため一端ゼロになった、基金も83,000円となっている。</p>